第16回 神奈川大学高大連携協議会フォーラム

企画・制作：神奈川新聞社クロスメディア営業局

昨年12月2日、第16回神奈川大学高大連携協議会フォーラム（主催：神奈川大学高大連携協議会）が開催された。今回は「持続可能な未来に向けて vol.2―地域連携を通じた教育循環―」をテーマに、昨年に続きSDGsの時代に求められる人材と教育の役割について、基調講演、教育現場での取り組みについての実践発表が行われた。新型コロナウイルス感染症対策の下、フォーラムに先だって行われた第39回神奈川大学高大連携協議会も合わせ、会場の神奈川大学みなとみらいキャンパス・米田吉盛記念ホールには、県内・外から多くの高校・大学関係者が参加、熱心に耳を傾けた。講演と報告の概要を紹介する。

開会あいさつ

地域活性化と教育がリンクした持続可能な活動の推進

神奈川大学長
神奈川大学高大連携協議会会長
小熊 誠

本フォーラムは今年で16回を迎えます。

今回は『持続可能な未来に向けて vol.2―地域連携を通じた教育循環―』をテーマに開催いたします。これは昨年度のテーマ『持続可能な未来に向けてSDGs教育の在り方』の第2弾、持続可能な社会を実現するためにはどのような教育が必要か…。地域を含めて考えたいと思います。

地方が将来にわたって成長を確保するには、少子高齢化に歯止めをかけ、地域の人口減少と地域経済の縮小を克服して、人々が安心して暮らせるような持続可能なまちづくりと地域活性化が重要となります。

地方創生とSDGsは密接な関係があります。文部科学省においても、新高等学校学習指導要領を踏まえ、地域を支える人材育成のための教育改革を目指して、地域との協働による高等学校教育改革の推進授業を提唱しています。これは高等学校が自治体や高等教育機関、あるいは産業界などとの協働で、地域課題の解決などの探究的な学びを実現する、そのような取り組みを推進する、地域振興の核としての機能を高等学校が担うということです。

このような状況の中、今回は本学における地域貢献活動の事例、学生の皆さんの成長と地域活性が密接に結びついた、教育循環としての成果をご紹介します。

例えば本学体育会サッカー部による竹山団地プロジェクトです。神奈川県住宅供給公社の竹山団地を寮として、サッカー部員が入居し共同生活をしています。そのサッカー部員が竹山団地や施設周辺地域の活性化、地域コミュニティーの諸課題に向けた取り組みを自治体と共に実践しており、この活動は学生の皆さん自身の成長にも大きく寄与しております。

身近にある地域に注目し、地域活性化と教育をリンクさせた持続可能な活動を考える、今回のフォーラムがその第一歩となれば幸いです。

会場となった神奈川大学みなとみらいキャンパス・米田吉盛記念ホール

基調講演

世界的に見るSDGsの流れと人間開発を中心とした地域連帯と教育循環について

神奈川大学 人間科学部人間科学科
特任教授
小倉 乙春氏

SDGs二つのキーワード

SDGsとは、基本的に私たちの世界を「変革」すること、トランスフォームですね。「全然違った形で世界を変えていこう」というチェンジではなくトランスフォームですね。「だれ一人取り残さない社会の実現」がキーワードです。

SDGsの捉え方として、五つのPとして表現されることもあります。人間（People）、豊かさ（Prosperity）、環境（Planet）、パートナーシップ（Partnership）、平和（Pease）、この五つが持続可能な世界を実現していこうということですね。人口問題と環境問題に関しては、もう時間がありません。そういう意味では「地球は人間なしでは存続できても、私たちは地球がなければ存続できない。先に消えるのは私たちなのです」という前ナイジェリア環境大臣アミーナ・モハメッド国連副事務総長の言葉がそれを物語っていると思います。

SDGsへのプロセス

SDGsには①理解②改善③創造④仕組み化―という四つの段階があります。

また、SDGs誕生の背景には、経済開発→人間開発→MDGs→SDGsという世界の社会問題解決へのアプローチがありました。

かつて1960～70年代、国連やIMF、世界銀行などによる経済開発という、主に発展途上国に資金を入れて地元の産業を発展させる政策は完全に失敗しました。

一方、人間開発とは、「人々の生活や人生を豊かにすることであり、経済的に豊かにすることではありません。経済的な豊かさは人々の営みのほんの一部でしかありません」という、インドの経済学者、哲学者でノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・セン博士の言葉のように、経済中心ではなく人間中心の考え方でした。また、MDGs（ミレニアム開発目標）は、人間開発の原則に従い、基本的な条件整備（極度の貧困と飢餓の終結、健康と教育の促進など）に対処し人間の能力の拡大を目指すものです。

このプロセスに見られるように、SDGsは基本的に人間中心の哲学、考え方に基づいて考えられたものだということをぜひ抑えていただければと思います。

ケイパビリティ（能力）理論とはセン博士が、経済学者として統計学や科学を用いて分析をしていた形です。自由・選択、主体性を発揮しながら能力を高めていくこと。最近よくいわれるDoing、Being（する、なる）なる行動機能を身につけていくことなど、まさに世界的な動きですね。その基盤になるのはあくまで人間が成熟していくことだと思います。

ウェルビーイングとは

私たちの世界をより良いものにするのは経済ではありません。経済は目的ではなく、あくまでも手段なのです。では、私たちは何を目指せばいいのでしょうか。それがウェルビーイングです。

ウェルビーイングとは、幸せ、調和、アイデンティティー、充足感、自己実現、自尊心、コミュニティー、悟りなど、その人にとって本質的に価値のある状態のことです。

OECD（経済協力開発機構）は「貧困層への教育など、格差問題に取り組めば、社会を公平化し、経済を強固にできる」と言っています。つまり格差問題に取り組まないと経済が発達しないんですね。

OECD Education（エデュケーション）という概念がかなり前から研究されていますが、知識、スキル、態度、価値を高め、個人と社会の「ウェルビーイング2030」を目指そうということです。つまり、「学びに向かう力・人間性」「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」という三つの力を伸ばしていこうということもあります。新学習指導要綱の前文でも「…豊かな人生を切り拓き持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」とうたわれており、重要な考え方であるといえます。

スポーツとSDGs

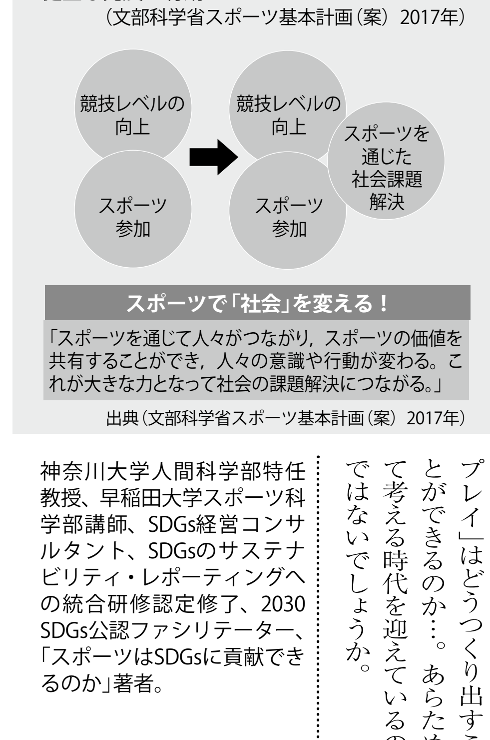
SDGsとスポーツはどう関わってくるのでしょうか。

SDGs宣言文37条に「スポーツは持続可能な開発の実現を支える重要な要素（イネイブラー）です。私たちは、平和と開発のためのスポーツを通じて、寛容と尊敬の促進、女性と若者、個人のエンパワーメント、そしてコミュニティー、健康、教育、社会的包摂といった開発目的に対するスポーツの貢献が増大していることを認めます」とあります。

日本の新しいスポーツ基本法にも「持続可能な開発と平和な社会課題解決に貢献するスポーツの価値を高めるための投資は、社会の健全な発展に有効」という言葉があります。競技レベルの向上やスポーツ参加に加え、スポーツを通じた社会参加・課題解決は、今や国際的な潮流になっています。当然スポーツ選手たち、特に注目されるトップアスリートはこの意味をしっかり認識していただきたいと思います。

また、部活運営の地域への移行が注目される中、文化活動も含めて地域とどう連携していくかも課題になります。いわゆる体育系の部活あるいは文科系、音楽系の部活においてもどこに立ち位置を置くのかが重要になっているのです。

勝利指向、全国制覇指向に入れない子どもたちの受け皿はどうするのか、みんなが参加できる「公平さ」「フェアプレイ」はどうつくり出すことができるのか…。あらためて考える時代を迎えているのではないでしょうか。



出典（文部科学省スポーツ基本計画（案）2017年）

神奈川大学人間科学部特任教授、早稲田大学スポーツ科学部講師、SDGs経営コンサルタント、SDGsのサステナビリティ・レポーティングへの統合研修認定修了、2030 SDGs公認ファシリテーター、「スポーツはSDGsに貢献できるのか」著者。

持続可能な未来に向けてvol.2 ―地域連携を通じた教育循環―

実践発表❶

「竹山団地プロジェクト」を通した多様なキャリア教育の実践について

神奈川大学体育会サッカー部 監督
大森 酉三郎氏

F+1新たな可能性

私が神奈川大学体育会サッカー部監督に就任したのは2004年、34歳のときです。その後、湘南ベルマーレなどを経て19年に復帰しました。

就任当時、どういう指導をしようか考えていたときのこと。大学の創立者、米田吉盛先生の「教育は人を造るにあり」という言葉が目指すべき方向を示してくれました。

まず始めたことは「ごみ拾い」。これをみんなでやろうじゃないか、とスタートさせました。フットボール（F）+1の活動、スポーツ以外の新たな可能性を目指す取り組みです。

加えて、さまざまなイベントに行きました。三ツ沢陸上競技場の草取りもやりました。社会に参加すること、それを一生懸命に楽しもう！を合言葉に、オン・ザ・ピッチでフットボーラーとして生き生きと、そしてオフ・ザ・ピッチの社会でもいろいろな経験を積んでいました。

何とその年に関東リーグ2部昇格。さらに07年には同1部昇格を果たすことができました。プロになれなかった選手たちも意気揚々とごみ拾いに取り組み、卒業後には社会人としてこの経験を生かし、またアマチュアクラブでも活動を継続してくれたのが印象に残っています。

竹山団地プロジェクト

横浜市緑区の竹山団地は1971年に建設された135棟ある郊外の大型団地です。現在、住民の高齢化が進み高齢化率・平均年齢とも緑区を大きく上回り、体の不調や精神的不調を抱えた方がとても多い状況です。

この竹山団地をサッカー部寮として活用させていただいたのです。まずやり始めたのが草取り。次いで防災備蓄の点検、池の清掃、環境整備は毎週のようにやっています。それ以外にも、若者の得意なスマホの操作をお年寄りに教えたり、子どもたちの宿題応援団などにも取り組んでいます。昔から団地で行われている竹山文化祭、芋煮会、花火大会、灯籠流しなどは、高度成長期に全国から集まった方々が育ててきた文化です。それを継承することの大切さを痛感しています。

竹山団地プロジェクト活動風景（スマホ教室）

2020年から始まったサッカー部の取り組みでは、これまでの若者の減少、引きこもりがちな独居老人といった負のループから、学生のさまざまな取り組みをきっかけに高齢者が外出するようになり、学生たちを「孫のようだ」と身近に接していただく「正のループ」がまわり始めました。学生たちも社会の一員としてのさまざまなキャリアを積んでいます。

竹山団地の未来に向けて

今、竹山団地のシンボル竹山の周りで、未来へのさまざまな計画が進んでいます。

第一に昨年の食堂の開設。次に、神奈川県住宅供給公社、竹山の連合自治会、私たちサッカー部、そしてもちろん神奈川大学も含め、空き店舗に低酸素ジムや高齢者がいらっしゃるので介護予防につながる取り組み、スマホ教室や学習支援の場として、銀行の跡地に地域の皆さんと交流できる多目的ホールの建設計画も動き出しています。今後は、これらのマネージメントを除々に学生にシフトさせて参画させていく、そういう運営の上でも新たな形を考えています。

多彩な人材を輩出する

私たちは、この活動をウェルビーイング・フットボールと名付けました。もちろんサッカーで実績を残したい。プロ選手もどんどん輩出したい。一方で、「竹山団地プロジェクト」によって、多彩な人材も多く輩出していきたいと思います。

この活動は横浜市をはじめ、地域との共創です。地域、区、市や企業の皆さまとの連携で効果的なオープンイノベーション、産学公民連携を目指します。

2028年、神奈川大学は100周年を迎えます。「世界へ、そして未来へ」のキャッチフレーズの下、学生一人一人と向き合って、より大きなスケールの人間に育てていくことに取り組んでいきたいと思います。

2004年に神奈川大学の監督に就任し、同年関東大学サッカーリーグ2部昇格。07年に同2部優勝。翌年同1部初昇格。湘南ベルマーレ（アカデミーダイレクター兼U18監督）、星槎グループクラブ長を経て19年4月から監督に復帰。神奈川大学スポーツ戦略室専任職員を兼務している。

実践発表❷

他者への思いが還元される「上越高校流地域と共に成長する実践型教育」

学校法人古川学園
上越高等学校　教諭
藤川 祐司氏

上越市そして上越高校

新潟県上越市は、新潟市、長岡市に次ぐ人口18万人の都市です。雪深いまちで、日本のスキー発祥の地として知られています。

上越高等学校は、600人規模の私立学校。2024年に120周年を迎えます。

私と上越高等学校サッカー部との出会いはプロ最終年のこと。次の年に引退が決まっていたのですが、ご縁があって理事長と校長にお会いする機会がありました。そこで、生徒募集とサッカーを強くして学校を元気にしてほしいとの話をいただいたことがきっかけです。

部員5人からのスタート

2016年4月から勤務しました。ゼロからのスタートでしたので部員もおらずグラウンドもない。結局、フットサルの同好会にいた5人を勧誘し、その5人でサッカー部を立ち上げ、残りは片っ端から声をかけて、なんとか18人を集めました。ただサッカーの経験者は最初の5人だけ、もちろん出場した大会でも一度も勝つことができません。0対10とか、それまでのサッカー人生で経験したことがないようなことがたくさんありました。

何をやっても試合に勝てない、練習ではすぐにへろへろになるような部員たち。そこで、サッカー以外のことで何かやれないかと思いつきました。念頭には、大森監督に指導された地域貢献活動、またJリーグの地方クラブで経験した地域活動がありました。これを組み入れながら地域に愛されるクラブをつくっていきたい、との思いで学校周辺の清掃活動をスタートしたのです。

「こんにちは。上越高校サッカー部です。何かやれることありませんか」。週2日、練習が終わったあとに地域に出てあいさつをしながらの清掃活動…。その中で、部員同士のコミュニケーションも育まれました。

清掃活動を通して歴史を学ぶ（保阪邸）

まちと共に成長した7年

「できることからやろう」という小さなスタートでしたが、年々活動場所も増えました。それらの活動は、メディアやSNSを通じて必ず発信するようにしています。その結果問い合わせも増え、一気に活動の幅が広がりました。

一例として、上越市にある保阪邸は豪農の屋敷で外国の方も多く訪れる観光資源ですが、その保阪邸で、高齢の家主さんからの依頼で年に4回ある一般公開日の前日に訪れる方たちをお迎えするために、清掃、落ち葉拾い、草取りなどを行っています。

活動が広がるにしたがい、うれしい反応も返ってくるようになりました。地域の方から野菜、魚介、肉など、差し入れがものすごく多く届くようになり、また、スポンサー契約のお話をいただくようにもなりました。それ以外にも地域の方々にグラウンドの除雪をしていただいたり、活動の循環ができ始めています。

今では、部員数は100人を超え、最下位から始まったサッカーの実績も昨年度は全国高校サッカー選手権大会の県予選で3位になりました。全国まであと一歩というところまで成長することができています。

まちづくりの担い手を

本校のグラウンドのスタンドには、特別な試合でなくとも多くの人が見に来てくれます。大人も子どもも、そしてお年寄りも一緒にサッカーの応援をする、とてもいい空間が展開しています。

私たちがやっていることは当たり前のことにすぎません。地域のことを知る、地域の方に話し掛けてみる、その連続です。それが輪になって、生徒の成長という形で循環しています。

特にSDGsを意識して始めたわけではありませんが、地域に出掛け、知る中でさまざまなことが見えてきます。「こんなことやりたいのだけど」という生徒たちの思いや言葉に、まちづくりの担い手づくりの大切さを、あらためて感じています。

2010年神奈川大学卒業。10～15年Jリーガーとして活躍。16年より学校法人古川学園上越高等学校保健体育科教論およびサッカー部監督に就任。就任当初5人しかいなかった部員を、地域連携活動を織り交ぜながら成長させ、現在は部員約100人の県内有数の強豪校に導いた。